

児童の実態および定期考査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表

教科名	国 語
-----	-----

	児童の学習状況についての実態	区の学力調査と学校の結果分析	内容別・観点別の分析
第 1 学年	<p>・国語の学習に意欲的に取り組み、読むこと、書くこと等を生き生きと行っている。平仮名を読むことは、よく出来るようになっている。平仮名を全部書くことは、全員できているが、点画や正しい字形については、繰り返し指導が必要である。</p> <p>文章の読み取りでは、楽しく読むことはできるが、言葉を正確にとらえて、内容を理解した上で、書いたり答えたりする力は、十分とは言えない。</p> <p>・言語事項では、助詞、「は」「へ」「を」の表記や促音の「っ」を書く位置の間違えがある。</p>		<p>・ひらがなを読んだり書いたりする力は十分ついている。</p> <p>・文章の読み取りでは、書かれている内容の把握のために言葉に気をつけることを徹底して指導していく。文章の中の助詞、「は」「へ」「を」や促音などの書き間違えがあり、文章を書く力が十分ではない。これは、日々、繰り返し指導していく。</p>
第 2 学年	<p>・国語の学習に意欲的に取り組む児童が多い。音読練習もほとんどの児童が毎日家庭で取り組んでいる。休み時間や空いた時間にも、読書に取り組んでいる。</p> <p>・話したり、聞いたりする活動には、ほとんどの児童が意欲的に取り組んでいる。しかしなかなか自分の思いや考えを発表できない児童も 10 % 程度いる。登場人物の気持ちや場面の順序をとらえることは、おおそ出来ている。自分の思った事を書くことに関しては、順序よく書けなかったり、自分の考えを整理して書けなかったりする児童が数名いる。言語事項の漢字を正しく書くことについては、個人差が大きい。</p>		<p>・話すことについては、スピーチなどにより、繰り返し取り組んでいるが、個人差が大きい。話す内容に自信がないことから声が小さい児童もいる。聞く態度は良く、話した内容に適切な質問をすることができる児童が多い。読書に積極的に取り組んでいるため、場面や心情の読み取りの力も付いてきている。日記などを書かせる機会を増やすことで、言語事項の定着を図る。</p>

第3学年	<p>・進んで話し合ったり自分の考えを書いたりすることはよくできていた。場面の移り変わりや情景を、叙述をもとに想像しながら読む力も身についてきた。漢字の読み書きをはじめとした言葉や文章のきまりを理解することは、まだ十分ではない。</p> <p>・国語の学習で、語や文章の中心に気をつけて内容を理解することは、おおむねできている。話を最後までしっかりと聞くことは、まだ十分にはできていない児童もいる。言語事項では、漢字を書いたり文章の中で使ったりする力が、まだ不十分である。</p>		<p>・年間を通して家庭学習として音読や漢字の練習に取り組ませる。また朝や帰りの会でスピーチをしたり、1日の振り返りを書いたりして、自分の思いや考えをはっきり伝えられるようにする。また、朝読書・授業での並行読書など、様々な読書活動を取り入れる。</p>
第4学年	<p>・物語教材で場面を想像しながら、登場人物の行動を読み取ることはおおそできている。登場人物の心情を正確に読み取ることは個人差が大きい。説明的文章で段落と段落との関係を考えながら読むことに苦手意識が高い。漢字は読むことはおおそでるが、漢字を書くこと、漢字を文章の中で使うことが完全には定着していない。文章を書くこと、話すこと・聞くことは、身につけられている児童とそうでない児童の差が大きい。</p>		<p>・漢字の学習は年間を通して継続的に繰り返し取り組ませる。朝の会でのスピーチ、話し合い活動、学習後や行事後の作文を年間を通して継続的に行い、自分の思いや考えをはっきり伝えられるようにする。詩の音読や読書活動など、様々な言語活動を取り入れる。</p>
第5学年	<p>・文章を読み取る力は、おおそできているが、人物の心情を文章から根拠を見つけて読み取る力はまだ不十分である。漢字を正しく書いたり、文章を見直して正しく直したりする問題では、まだ定着がはかれていないことが多い。話すこと聞くこと読むことについては、80%以上をとっている児童が多かった。</p> <p>・文章から根拠を見つけて読み取る力や前学年までの漢字が定着していない。自分の考えを整理しわかりやすく表現する力が十分に身につけていない児童があり、個人差がある。</p>		<p>・漢字の練習は年間を通して継続的に取り組ませる。読書を通して語彙力をつけさせていく。日々の授業の中で、自分の考えをまとめて発表したり書いたりする活動を充実させていく。</p>
第6学年	<p>・どの内容についても平均を上回る結果を出している。特に、「書くこと」の領域においては、平均よりさらに高い評価となっており、結果を出している。</p> <p>・5つの観点について、バランスよく取れているが、「読むこと」については平均よりも上回っているものの、ほかの4項目よりは低い。今後も音読や読解など長文に触れる機会を増やし、会話力や表現力を身に付けていくとともに読む力も身に付けさせていく。</p>	<p>・「話す・聞く」「読む」「書く」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、いずれについても、全国平均や区の平均を上回っている。書くことについての領域では平均を上回ってはいるが偏差が小さい。</p>	<p>・指導法や教材を工夫することにより、関心意欲を高め、いっそうの学力の向上を図れると考えられる。年間を通して「スピーチ」を行い、自分の思いや考えをはっきり伝えられるようにする。また、詩の音読や読書活動など、様々な学習活動を取り入れる。</p>

児童の実態および定期検査を含む調査結果等に基づく内容別・観点別の分析表

教科名	算 数
-----	-----

	児童の学習状況についての実態	区の学力調査と学校の結果分析	内容別・観点別の分析
第 1 学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10 までの数の加法については、全国平均を上回る正答率であった。20 までの数における数の分解と合成、順序など初歩的な概念の理解は個人差がでている。 ・ 技能では全員が 90% 程度の理解である。数学的な考え方では 7 割の児童が 90% 程度の理解であるが、一部の児童は文章題を読み取ったり立式をしたりする力が十分ではない。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 加法の技能は十分であるが、知識・理解、数学的な考え方には個人差がある。文章の問題では、読み取る力の不足も原因であると考えられる。繰り返し学習経験をさせ、多くの問題にふれ、身につけさせていく。
第 2 学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ たし算とひき算のひっ算では、繰り上がりや繰り下がりが無いのにやったり、たし算とひき算を混同してしまったりするミスが目立った。時こくと時間では、一定時間前や後の時刻を求めることが苦手である。ものさしを使って長さを測定したり、直線をひいたりする場面では個人差がみられる。 ・ 知識・理解については、9 割方理解している。技能は 8 割台であり少し落ち込みが目立つ。また、単元による個人内差がみられる。数学的な考え方では単元による個人内差と共に、個人差もみられる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 筆算では、繰り上がり下がりやの有無混合タイプの練習問題を重ねていく必要がある。時こくと時間においては、家庭での協力を含め、日常的に継続し、定着を図る。
第 3 学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間の問題の理解が不十分な児童が 10% 程度みられる。計算力は反復練習により、全体的によく身に付いている。 ・ 数量の知識と表現理解について 90% 近くの児童が理解している。図形についても 80% 程度正解しているので理解しているといえる。数学的な考え方については、個人差が大きい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 数学的な考え方については、文章題の読み取りが正確にできない児童が多い。そこで、場面把握の手立てとして、テープ図や線分図を取り入れていく。
第 4 学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 表現処理については、おおむね理解している。一兆以上の数の構成、平行や垂直の概念の理解が十分でない児童が見られる。図形の作図の技能、文章問題の数学的な考え方は個人差が大きい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ かけ算わり算については、引き続き確実に計算できるよう取り組ませていく。大きな数や平行垂直の概念の理解、作図技能については繰り

			返し経験を積ませ、適宜個別指導を行っていく。
第5学年	<ul style="list-style-type: none"> ・計算の仕方や決まりなど、知識・理解の面では、十分に理解している児童が多く、各単元で90%以上の正解率を出している。それに伴い、計算の力なども身に付いている。 ・文章問題では、立式の根拠となる部分を見つけだすことが困難で、式が立てられない児童が7%程度いる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・計算練習、特に小数の乗法・除法に繰り返し取り組ませ、技能面での学力定着を図る。 ・文章問題では、立式の根拠となる数直線や線分図などの指導に力を入れ、力を身につけさせる。
第6学年	<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼバランスのとれた正答率を上げ、平均を上回ることができている。しかし、個々の学力差は大きく、学年相応の力が身につけていない児童が10%程度見られる。 ・難易度に合わせた問題を準備しておき、個々の力に合わせた学習を進める必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数学的な考え方や数量・図形などについての知識・理解については平均を大きく上回る。表現・処理については平均を上回るが偏差が小さい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・区の平均を上回り一定の成果がみられる。計算力などの基礎基本の定着はあるので、より正確に問題が解けけるように落ちついて取り組ませる。また論理的な思考ができるよう一人一人の学力の向上を目指す。